

探偵事務所season 1

佐渡カラ君

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天才的な頭脳を持つ上松東と、その親友の川杉智也が、警察と一緒に（警察の邪魔をしながら）捜査を進めていきます！

season1の投稿済み小説は、

1話 登場人物

2話 手足バラバラ殺人事件1（旧題・・・「手足バラバラ殺人事件」「あなたに恋をして」他 もう一つの旧題手首バラバラ殺人事件（おそらく）

3話 手足バラバラ殺人事件2

です。

この物語の原作は相棒となっ
ていますが、相棒の登場人物は
season1にはおそ
らく登場しません。

目次

Season 1 | 1 | 手足バラバ

ラ殺人事件

登場人物 | 1

手足バラバ殺人事件 1 | 5

手足バラバ殺人事件 2 | 12

season 1 — 1 — 手足バラバラ殺人事件
登場人物

上松東（うえまつあずま）（28）

探偵事務所を経営している。あたまがよく、世に言う天才である。人づきあいが悪いので、捜査一課と仲が悪い。が、勝手に捜査をする。

大の上海好きで、年に一度は上海に旅行に行く。大阪府出身。だが、2歳の時に埼玉県に引越してきた。

川杉智也（かわすぎともや）（27）

東の親友。3年前に起きた事件をきっかけに、事件の捜査をすることが多くなった。今回は、その事件のことを詳しくやる。今まで恋とは無縁の人生を歩んできたが、捜査一課の坂家に思いを寄せられていることを勘づっている。東京都出身。

大和田仁助（やまとだじんすけ）（30）

警視庁捜査一課の刑事。巡査長。相当な正義感の持ち主で、時には上司に逆らうこと

もある。実は小学校時代に上松と同じ学校だった。そのためもあってか、なぜか上松を嫌っているようだ。名刺を渡すと、よく「おおわださん」と間違えられる。埼玉県出身。

宇佐美澁谷（うさみしぶや）（25）

警視庁捜査一課の刑事。巡査。大和田や、坂家と同じ班に属す。上松のことを信頼して、大和田には秘密でよく捜査の状況や情報を流したりしている。中二の妹がいる。坂家に猛烈なラブコールを送っているが、全く相手にされていない。長野県出身。

坂家希（さかいえのぞみ）（24）

警視庁捜査一課の巡査。女性で刑事になれたということ、上松や園宮からも一目置かれている。川杉に密かに恋心を抱いている。見た目とは裏腹に、酒に強い。千葉県出身。

裏敦（とどろきあつし）（39）

この道14年の準ベテラン刑事。（基準はないが。）上松とは犬猿の仲で、時々捜査の邪魔をする。しかし、実は今までに一度だけ上松に捜査情報を提供したことがあった。

梶美弥（かじみや）（25）

上松の3つ下の妹。結婚したので、苗字が変わった。上松とは全く性格が逆で、しゃべってないと気が済まない。JNP（ジャパンニュースパー）に勤めていて、噂好き。年下からの恋の相談をよく受ける。埼玉県出身。

梶坏（かじあつく）（26）

3年前に、梶美弥とできちゃった婚をした。厚生労働省麻薬取締部、通称「マトリ」に勤めている。佐賀県出身。

「じゃあ、いつてきます。」

「おお、いつてらっしゃい。」

「本当に大丈夫か？」

「大丈夫大丈夫。俺を疑うなよ。こう見えてもな、俺はしっかり者なんだぞ」

「・・・じゃあ、本当にいつてきます。」

ガチャ、という音とともに、上松が出て行った。

「さーと、何からしようかなー」

ここは上松が経営している探偵事務所。1階が受け付け、2階が相談所兼、家に帰れなかった時の泊まる場所。今日から1週間、上松が上海に行くためこの探偵事務所を任されることになった。もちろん、上松の唯一の親友、川杉が。

しばらくソファに座っていた川杉は、冷蔵庫を無造作に開けてコーヒーを取り出す。

「あれ〜ここ、牛乳置いてないのか？」

つんだよ〜普通牛乳くらいいつ

もあるだろ。」

ということで、川杉は近くのコンビニ、ステンデーズに牛乳を買いに行くことにした。

手足バラバラ殺人事件 1

【手首バラバラ殺人事件】

ピンポイント、警視庁捜査一課の宇三美が探偵事務所のインターホンを鳴らした。

「やっぱりいいいですよ、前、今度旅行に行くって言ってたじゃないですか。聞いてなかつたんですか？」

こう、言ったのは、捜査一課で宇三美と同じ班の坂家だ。すると、

「だいたい、なんで捜査一課が私立探偵に協力してもらわなきゃいけないんだよ。こつちの砦はこつちの砦。自分のことは自分でやらないとだめだつーの。」

と、上松に謎の敵対心を抱く捜査一課の大和田が言う。

欧米では探偵も実力が認められるが、ここではただの邪魔者。くわえて、上松は人づき

あいが悪いので、ほぼすべての人間を敵に回す。

そこに、ステンダーズというコンビニエンスストアから帰ってきた上松の親友、川杉

が
帰ってくる。

「どうしたんですか？何か御用でも？」という、川杉の問いに、宇三美が答える。

「あ、川杉さん……ですか？私たち、警視庁捜査一課のものです。あ、私は宇三美です。いつも上松さんにはお世話になっていきます。今日はですね、殺人事件があったので、上松さんにいろいろ聞いてみようと思ひまして。」

「なんで、東に？」

「いや、あの、いつも、いろいろ協力してもらってるんで……」

「あ、そ。で？なにか？」

「いや、もう用はない。大体いっつも頼ってちゃいけないんだよ。ほら、帰るぞ。お前ら。」

ここで、やはり大和田が口をはさむ。

しかし、そこで、新人女性の坂家が反論した。

「だめですよ。協力できる人は、協力する。できることは、やる。捜査に必要なものは何でも使うって、先輩いっつも言ってるじゃないですか。無駄なライバル精神なんて捨てて

て、仲良くやりましょうよ。それで一日でも、一秒でも早く事件を解決できればいいじゃないですか。」

「お、おう……」

「すごいですね。坂家さん。先輩黙らせましたよ。」

「じゃあ、川杉さん？も、一緒に車乗って現場に行きましょう。」

坂家は、この時からもう、川杉に好意を寄せていたのかもしれない。もつとも、それは本人にはわからないが。

現場である、東京都某所の佐々礼山について一行は、現場で捜査を続けている本部の人

間と合流した。

「ところで川杉さんは、手足バラバラ事件については知っていますよね？」

「知らん。俺、ニュースとか見ないんだよ。」

「そうすか。」

と、川杉と宇三美が話しているところで坂家がこの事件についての説明を始めた。

「この事件の通報があったのは14日の午前6時10分。通報者が名前を名乗らずに電話を切ったため、通報者については女性ということしか判明していません。遺体が発見

されたのはこのトイレの裏です。軽く落ち葉がかかっていたりましたが、鑑識の話による

と、死亡推定時刻はこの日の午前3時から午前6時までなので、おそらく犯人が死体
が
で見つからないように掛けたものと思われます。そして、被害者は都内で自営業を営ん
で

いる中村民雄さん、46歳。

近所の人の評判は非常に高かったです、正義感が強く、先日も煙草を道に捨てた若
者

に注意して殴られたそうです。死因は刺殺。刃渡り15センチほどのナイフで、胃の
近

くを刺されたとみられます。ほかにも、頭などに石で殴った跡がありました、致命
傷

ではないとのこと。事件後、このトイレの周辺は封鎖され、出入りしたものは警
察

関係者しかいません。そして、この山は山道が3道ありますが、あ、ダジャレじゃ
な

いですよ。あ、で、山道が3道ありますが、入り口は1つとのこと。その入り口
も午

も
前5時からしか開いておらず、入り口からこのトイレまでは成人男性が走って行つて

時
50分はかかるため、死亡推定時刻と合わせると犯行可能な時間は5時50分から6

時
ちょうどまでのわずか10分間しかありません。現在、その時間に不審な人物を見な

ろ
かっ
たかどうかを付近の住民やここの近くで勤めている方々に聞いていますが、今のところ

が
有力な情報はありません。・・・そして、この事件の一番の特徴は、死体の、足、頭

場
ばらばらの状態で発見されたということです。左足と右足以外の場所はこの発見現場

で、右足の発見現場は入り口のゲートの前で、左足はまだ見つかっていません。」
「ほお、長かったな。うん、何となくは分かった。ひとつ質問なんだが、死体の

上には軽くしか落ち葉がかかっていたんだよね？」
「はい。」

「おかしくないか？なぜ犯人はそんなしか落ち葉をかけなかったんだ？」

「そりや、風が吹いて飛んだとか、かけようとしたりけどだれかにみつかつてやめたとか……」

その大和田の言葉に、川杉が反論する。

「それも有り得るけど、たしか昨日はほぼ無風だったはずだよ。それに、このトイレの裏の構造を見てみて。トイレの裏とは言ってるけど、そこにはいくつかの壁によつて

作られた空間がありだろ？。風がもし吹いていたとしても、その風がここに来るとはほ

とんど考えられないだろ？」

「さっすが、上杉さんのお友達と会って、頭がいいですね。」

「はじめて言われたよ。あと、もう一つ。発見者の女性は、なぜこんなトイレの裏に入ったんだろう？」

「あ、ほんとだ……」

「確かに……」

坂家と、宇三美がそれぞれ感心する。

「それに、名前を名乗らなかつたのも怪しいですよ。ね？川杉さん？」

「え？あ、ああ。」

「じゃあ、さっそくほかの場所にも行ってみましょう。」

「ほかの場所？」

「ええ、ゲートの近くにある事務所です」

手足バラバラ殺人事件2

探偵事務所を経営している東の親友である川杉、そして、警視庁捜査一課の大和田、宇三美の3人は、同じく捜査一課の坂家に連れられて、「手足バラバラ殺人事件」（捜査本部の名前、佐々礼山遺体損傷殺人事件）の遺体の「右足」が見つかった山のゲートの

近くに向かった。「ここが、右足が見つかった場所です。現在は警察本部の鑑識係、又科捜研に送られています。見つかった当時は、このゲートの目の前にありました。

ここを通れば、見ようとしなくても見れてしまうでしょう。ちなみに、先ほど言うのを忘れていたんですが、遺体の近くにあつた血痕からは、遺体を切断したときに飛び散った

血もあるため、殺害現場は特定できないそうです。」

「ふーん、そう。でも、殺害現場はこのゲートより山側か、もしくは、先に殺害してから、犯人は山に来て、あのトイレの前で死体を切断したんじゃないかな。」

「どうして、そんなことがわかるんですか？」

「だって、トイレの裏の血痕が、遺体を切断したときに飛び散った血ってことは、死体を切断したのはあのトイレの裏で確定だろ？」

「はい」

「そうだな。あ！」

「おおわだ、だっけ？よく気づいたな」

「おおわだじゃなくて『やまとだ』だよ！それにお前より俺のほうが年上なんだから、

勝手にため口つかうな！もうちよつと敬意を示せよ。」

「なぜ、俺があなたに敬意を示さなきゃいけないんですか？」

「んだと〜」

「ほらほら、先輩、川杉さんも悪気があって言ってるわけじゃないんですから、許して

あげてくださいいよ。川杉さんも、大和田先輩、ちよつと気性が激しいので、気を付けて
て

くださいいね。」

言い争っている川杉と大和田を、宇三美が止めた。

「で、話は戻るけど、死体を切断したのがトイレの裏だつてことは、切断してから帰るときに、このゲートの前に右足を捨てたわけ。つまり、あの死体を発見した女性がき

た

のはおそらく・・・ うーん、女性はこつから何分くらいであのトイレに行けるのかな？」

そういつて、川杉は坂家のほうをゆっくり向いた。

「わ、私ですか？」

「うん、走ってきてくれるかな？」

「わかりました。、、ついたら、電話かけますね。」

「じゃあ、よーいスタート！」

川杉は、自分のストップウォッチつき腕時計のスイッチを入れ、坂家は、急いではしつてトイレに向かった。

「坂家は、運動得意なのか？」

川杉は、宇三美に聞いた。（本人的には、大和田にも聞いたつもりだったかもしれないが、大和田は無視した）

「結構得意な方だと思いますよ。いつも、休みの日には近所のスポーツジムで3時間は運動してるそうですか

ら。」

「よく知ってるな」

「いえいえいえ、そんなことじゃないですよ。」

「見てればわかるよ。お前、坂家のこと好きなんだろう？」

「え〜〜！　なんでわかるんですか？」

「うっそ、そうだったのか！」

全く話を聞いてないように見えた大和田が、いきなり口を挿んできた。

「大和田さん、知らなかったんですかあ？え？ずっと一緒に捜査一課の仲間としてやっていたんですよね？うっそだろ？まじかよ。大和田さん、鈍感ですよ。はっはっはっ

は!!!」

「んなん、知らねーよ。」

「まあ、そんなことは置いといて、通報した女性の大まかな年齢は分かる？」

「いいえ。わかりません。」

「そっか・・・ 仮にだよ。ゲートからトイレまでの往復が、1時間1時間の2時間だったとしたら、通報者は午前3時にゲートを出たことになる。」

「ちよつとまで。このゲートが開いているのは午前4時からじゃなかったか？」

「大和田さん、恋心には鈍感ですけど、刑事にはすごく向いてるみたいですね！」

「それ、褒めてるのか？」

「いいえ。まったたく。」

「うん。だと思った。」

「で、そうなんですけど、4時からしか開いてないのに死体を発見したという女性は

ゲートが開く前に、この山に

入っていたということなんです。つまり！犯人と第一発見者は同一人物で、その人物は

「この山の途中で働いている従業員か、ゲートの管理員なんです。」

「では、ゲートの管理員や、佐々礼山の店舗の従業員を探してみます。」

「おう、お願い。あ、そういえば、いま、坂家がこの山を登っているんだったな。どう

する？坂家を待ったほうがいいかもしれないけど、早く捜査を進めたい

な。 . . . じゃあ、あれだな。俺たちも山を登りがてら店

を回って捜査して、坂家が登り切ったらそいつも一緒に捜査をしよう。」

「そうですね。じゃあ、川杉さんと大和田先輩も一緒に行きましょう。」